

パリ講和会議と日本外交

第一特別調査室長

う さ み ま さ ゆ き
宇佐美 正行

つい最近まで憲政記念館で開催されていた「大正デモクラシー期の政治特別展」でとりわけ興味を引かれたのが1919年（大正8）に開催されたパリ講和会議に出席した日本全権団の展示資料であった。当時の原敬内閣は既に70歳の老齢で健康不安を訴える元老西園寺公望に首席全権就任を懇請し西園寺はやむなく全権を引き受けたとされる。展示品の中にはその西園寺が神戸港から丹波丸でパリに向けて渡航した際に使用した大型のキャビントランクが陳列され往事の全権団の姿をしのばせていた。

日本全権団は総勢60人近くと当時では破格の大人数で構成され様々な顔ぶれがそろっていた。近衛文麿は父篤麿と交際のあった西園寺の秘書役として同行していた。講和会議で実際の外交折衝に当たったのは全権委員代表格の牧野伸顕であったが、娘婿であり当時済南領事であった吉田茂は牧野に頼み込み随員に加わった。その際の牧野より吉田宛の「同行シタシ」の電文案も展示されていた。目を引いたのは後に衆議院議員となり原敬内閣を痛烈に批判した永井柳太郎が後藤新宛に送った書状である。永井は当時外遊中であったが日本の外交交渉の不甲斐なさをロンドンのホテルの便箋に鋭い筆跡で書き記している。

パリ講和会議は第一次大戦後の国際秩序の再建を討議する国際会議であった。日本は戦勝五大国の一員として国際舞台に登場したものの会議を主導したのは英米仏の三か国であった。主要議題であった国際連盟規約についても英国が早々に草稿をまとめていた。外務省が編さんした外務省百年史（『外務省の百年』）によれば、国際連盟問題については、外務省の準備委員会でも極めて研究不足、情報も不十分で、その実体をめぐってあれこれと憶測を巡らしている有様であり、「本件具体的成案ノ議定ハ成ルヘク之ヲ延期セシムルニ努メ」という方針が全権への訓令となっていた。当時の日本外交にとっては国際連盟と言えども実際は欧州秩序の問題であり、外交交渉にたけた海千山千の欧州諸列強の中に割り込み国威を示すといったことはなかなか難しいことでもあった。

パリ講和会議から百年近くが経過した。この間、国際政治の中心舞台は欧州であり続けた。しかし今日、その舞台はアジア太平洋に移りつつある。クリントン米務長官は先月の外交専門雑誌に「アメリカの太平洋の世紀」と題する論文を発表し米国の対アジア戦略を打ち出した。その米国が意識するGDP世界第二位に躍り出た中国との間では様々な思わくの違ひも目立ち始めている。かつて高坂正堯は欧州古典外交の底流には「共通の紐帯、文化的雰囲気、力の好ましい配分」が条件として存在していたと述べた。これら条件を欠くアジア太平洋で日本がいかに国益を確保し望ましい秩序形成にイニシアティブを発揮できるか。本当の意味で日本外交の構想力が試される時代が来たと言える。（文中敬称略）